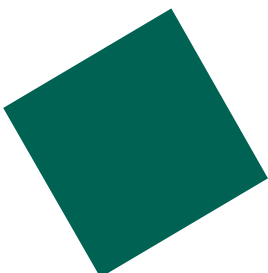


京都滋賀 体育学 研究

資 料

和智 道生他：ACL 再建術後および半月板部分切除術後の
心理・栄養学的変化について…………… 1

京都滋賀体育学会だより No. 40 …………… 9



京都滋賀体育学会

第 33 卷

平成29年 7 月

KYOTO AND SHIGA JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION, HEALTH AND SPORT SCIENCES

MATERIALS

Michio WACHI et al.:

Mental and nutritional change after anterior cruciate
ligament reconstruction or partial meniscectomy 1



Edited by Kyoto and Shiga Society of Physical Education,
Health and Sport Sciences

平成29年 4 月 吉日

京都滋賀体育学会会員 各位

京都滋賀体育学会理事会

平成29年度京都滋賀体育学会研究集会の公募について

謹 啓

時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

京都滋賀体育学会では、会員の皆様が開催する研究集会に対して補助を行います。下記の要領にて研究集会を公募いたしますので、多数ご応募いただきますようご案内申し上げます。

謹 白

記

目 的：京都滋賀体育学会の正会員が以下の目的で開催する研究集会を支援し、学会員及び学生や院生の教育・研究に寄与する。

1) 体育・スポーツに関する専門分野の研究促進

2) 他研究分野・他学会との連携

3) 学会員の研究室に所属する学生・院生・研究生の交流の場に対する教育支援

交 付 金 額：1つの研究集会に対して、学会共催として30,000円を上限として補助する。

応募資格・方法：申請時における正会員2名以上が世話人となり、所定の様式（別紙1）に目的、内容（研究発表会、講演会、実践研修会など）、実施日時及び場所、参加予定者を記入し、開催日の3か月前までに下記宛に電子メールの添付書類にて提出すること。申請書類は、京都滋賀体育学会ホームページ (<http://www.kyoto-taiiku.com>) からダウンロードすること。

提 出 先：電子メールアドレス「shukai@kyoto-taiiku.com」宛

選 考 方 法：平成29年度京都滋賀体育学会理事会にて審査し、承認する。

報 告 の 義 務：世話人は、研究集会の講演または発表者、参加者、補助金の使用状況等を明記した様式（別紙2）を、平成30年2月末日までに京都滋賀体育学会理事会（上記メールアドレス宛）に提出すること。報告書類は、京都滋賀体育学会ホームページ (<http://www.kyoto-taiiku.com>) からダウンロードすること。

※「京都滋賀体育学会研究集会に関する規程」が改訂され、平成27年度公募分から、申請の締め切りを開催予定日の3か月前までと変更しました。

以 上

ACL 再建術後および半月板部分切除術後の 心理・栄養学的変化について

和智道生*,**, 亀井誠生*, 福原祐介*, 今川新悟*, 高村裕介*, 伊坂忠夫*

Mental and nutritional change after anterior cruciate ligament reconstruction or partial
meniscectomy

Michio WACHI*, **, Mio KAMEI*, Yusuke FUKUHARA*, Shingo IMAGAWA*,
Yusuke TAKAMURA*, Tadao ISAKA*

Abstract

After anterior cruciate ligament (ACL) reconstruction or partial meniscectomy, athletes are interrupted from participate in a competition for a long period of time. An object of this study was to reveal a lack factor that can be conceived from a psychological and nutritional science point of view for athletes who have undergone an operational surgery due to injury in order to return to a sport by investigating, quantitatively monitoring and evaluating physical, psychological and nutrition assessment of the postoperative athletes. Three ACL injuries and two meniscus injuries (improvement group) and one meniscus injury (intractable group) were selected as the subjects among patients who went to the hospital for more than three months due to ACL or meniscus and who were suspended from participating a sport. Range of motion (ROM), questionnaire Profile of Mood States (POMS), Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D), and PSQI-J were measured for six subjects during a period of three month after the operation. In addition, Brief-type self-administered Diet History Questionnaire (BDHQ) was also measured for one subject in the improvement group and one subject in the intractable group. POMS, CES-D and ROM were improved for the improvement group and the calorie intake of BDHQ increased after the operational surgery. POMS and CES-D were not improved and BDHQ decreased, while ROM was not improved for the intractable group. It was implied that the psychological and nutritional status of the postoperative athletes were required to be grasped and approached in order to early return to the sport.

* 立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Sport and Health Science, Ritsumeikan University
525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
1-1-1, Nojihigashi, Kusatsu-shi, Shiga, 525-8577

** 医療法人金沢整形外科クリニック
Kanazawa Orthopaedic & Sports Medicine Clinic
〒520-3016 滋賀県栗東市小野881
881, Ono, Ritto-shi, Shiga, 520-3016

I. 緒言

スポーツ選手の傷害は、練習中断や試合欠場に繋がるため、早期の復帰が求められる。しかし、前十字靱帯(以下 ACL)や半月板損傷は、スポーツ競技復帰のために外科的治療を必要とすることが多く、復帰に時間を要する傷害である(Hewett et al., 1999)。現場では、競技活動の復帰を望む多くは完治を望み外科的治療を選択する。術後も靱帯や半月板が機能的に回復するまでには時間を要するため(日本整形外科学会, 2012)、長期的に通院でのリハビリテーションを行い、その後競技へと復帰することができる。しかし、通院リハビリテーションは、厚生労働省の規定や、高齢社会に伴う患者数の増加の影響もあり、1人の患者に対し毎日、長時間携わることは難しいため、筋力、関節可動域の改善には自主トレーニングが必要となる。その中で自発的な運動を促し、効果を高めるためにはモチベーションが大きく関わっており(日本スポーツ心理学会, 2005)、心理状態を含めた日常生活の送り方が復帰にも影響していると考えられる(Komada and Inoue, 2007)。スポーツ外傷後における心理状態を調査した先行研究では、心理状態の変化がリハビリテーションへの取り組む姿勢に影響を与えていることを報告している(Tatsumi and Takenouchi, 2014)。さらに、心理状態と関連して、ストレスに伴う日々の睡眠障害は、無気力症を生じさせることが報告されており、早期復帰を目指す選手への悪影響が懸念される(Baglioni et al., 2011)。

また ACL 損傷再建術後では筋量や筋力低下が起こることが知られており(Barker et al., 2009)、競技への本格的な復帰が遅れる原因のひとつであると考えられる。タンパク質の摂取は筋量や筋力増加に効果があることが広く知られている(Xu et al., 2014)。さらにタンパク質は、コラーゲン合成、プロテオグリカン合成、血管新生を促進することが知られており、損傷を受けた組織修復を早めると考えられる(Douglas et al., 2003)。またビタミン D の欠乏は、ACL 損傷再建術後の筋力の回復を遅延させることが報告されている(Barker et al., 2011)。これらの研究より、タンパク質やビタミンなどの栄養摂取状況を把握することは復帰

のために重要であると考えられる。

そこで本研究は、ACL 再建術後もしくは半月板部分切除術後のスポーツ選手における心理的、栄養学的な不足要因を明らかにすることを目的に、プロトコル通りに改善した軽快例と、改善が遅れた難渋例の理学的所見、心理、栄養状態について縦断的に調査を行い、比較した。

II. 方法

ACL 再建術後および半月板部分切除後、3ヶ月以上の通院リハビリテーションを必要とした6名(14—17歳)を対象とし、当初のリハビリテーションプロトコル通りに治療が進行した軽快例(ACL 損傷3例、半月板損傷2例)、治療が遅延した難渋例(半月板損傷1例)に分類した。ACL 損傷術後の対象者については ACL 損傷診療ガイドライン(日本整形外科学会, 2012)を参考に、術後8—10週間で全荷重での生活が行うことが出来、3ヶ月で膝屈曲130度が可能なものを軽快例とした。半月板部分切除後の対象者については術後1ヶ月で膝屈曲130度が可能であり、3ヶ月でジョギングが痛みなく行えているものを軽快例とした。また、期間内に前述の動作、可動域が獲得できず、術後3ヶ月においても痛みが残存しているものを難渋例とした。

対象者には定められたリハビリテーションプロトコルに沿った治療に加え、心理、栄養評価質問紙への記入を求めた。質問紙を来院時に配布し、心理評価は週に1度、栄養評価は1ヶ月に1度の頻度で回答してもらい、術前から術後3ヶ月まで記録した。栄養状態の回答に関しては20分程度の時間を要するため、対象者および保護者の協力が得られた2名(軽快例1名、難渋例1名)のみ実施した。それぞれの群において手術前、術後1ヶ月、術後2ヶ月、術後3ヶ月の各データを調査した。関節可動域の計測には東大式ゴニオメーターを用いた。なお、本研究は事前に立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会への申請内容(承認番号 BKC-人-2015-022)に基づき、全ての対象者、保護者から参加の同意を得た上で実施した。

心理評価は、Profile of Mood States(以下 POMS)を用

い気分、感情状態を観察した。本研究では、標準化得点を用いた。また、うつ病自己評価尺度として Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (以下 CES-D) を用いた。加えて、睡眠の評価として Japanese version of Pittsburgh Sleep Quality Index (以下 PSQI-J) (Buysee et al., 1989; 土井ほか, 1998) を用いて調査した。精神疾患を有する群と健常群を比較した研究でカットオフ値5.5点の場合に感度と特異度が最適であったことから (Doi et al., 2000), 本研究でも5.5点を下回った場合を睡眠の質が良い, 5.5点を上回った場合を睡眠の質が悪い状態と評価した。POMS, CES-D, PSQI の得点はそれぞれ平均値±標準誤差で示した。また、術前から術後3ヶ月までの時間の効果について下井 (2010) の方法を用い、最小可検変化量を求め、臨床的有意性を検証した。栄養面では、Brief-type self-administered Diet History Questionnaire (以下 BDHQ) を用いて1ヶ月間の摂取した食品 (飲料, 嗜好品も含む) の量について7段階で回答を求め、手術前における摂取エネルギー量, タンパク質量, 脂質量, 炭水化物量を基準に、術後の変化量を調査した。

Ⅲ. 結果

軽快例 (n=5), 難渋例 (n=1) の手術前, 術後1, 2, 3ヶ月後の関節可動域, 心理状態, および栄養状態を下記に示す。

関節可動域は、軽快例では膝関節前十字靭帯断裂術後は3ヶ月, 半月板損傷術後1ヶ月で正常可動域まで改善したのに対し, 難渋例は術後3ヶ月においても膝関節屈曲90度であった。さらに、軽快例でPOMS得点は手術前と比較して術後3ヶ月で緊張-不安, 抑うつ-落ち込み, 怒り-敵意, 活力, 疲労の5項目で得点の減少が見られた一方, 難渋例では緊張-不安, 抑うつ-落ち込み, 怒り-敵意, 疲労は手術前から術後1ヶ月で減少したが, 2ヶ月以降に再び増加が見られた。また, 活力の得点も, 術後3ヶ月で再び増加した (図1)。CES-Dについても軽快例では, 手術前 (12.83±2.88点), 1ヶ月後 (9.89±2.55点), 2ヶ月後 (8.81±1.56点), 3ヶ月後 (8.28±1.85点) で順調な改善が見られた一方, 難渋例では, 手術前で12点, 術後1ヶ月後5点, 2ヶ月後11点, 3ヶ月後15点と改善は見られな

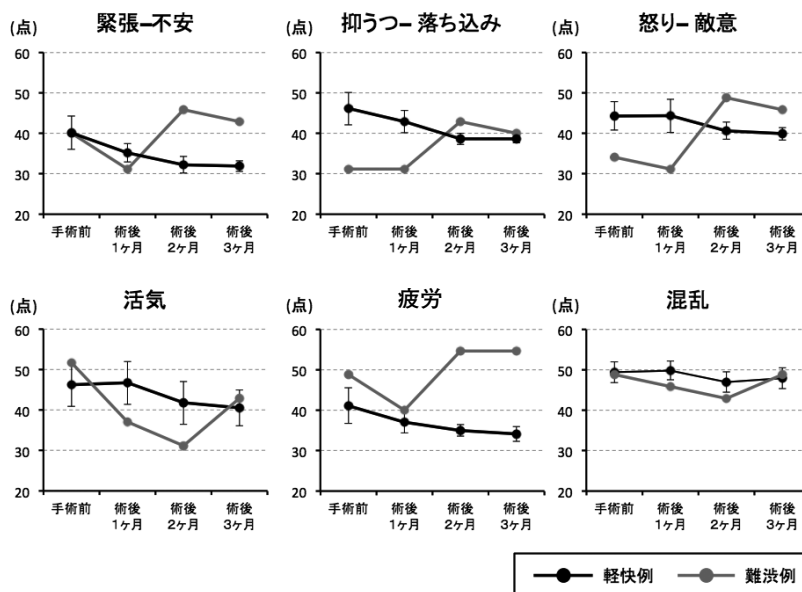


図1 POMS を用いた気分評価

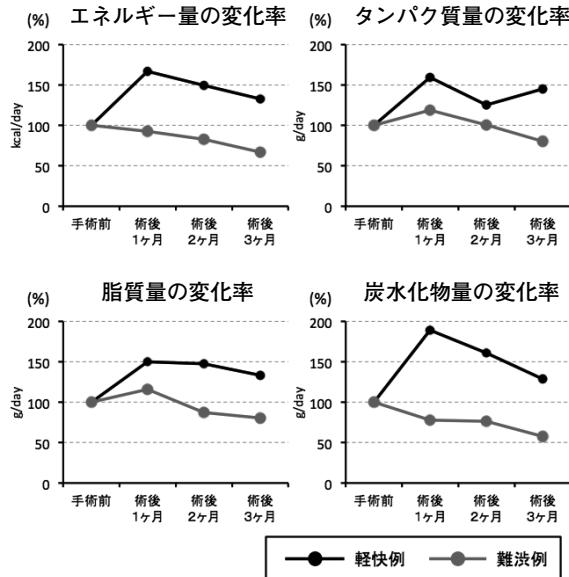


図2 BDHQを用いた栄養素の摂取状況

かった。PSQIの総合得点は、軽快例では手術前(8.67 $\pm$ 2.38点), 術後1ヶ月後(5.33 $\pm$ 2.04点), 2ヶ月後(3.00 $\pm$ 0.82点), 3ヶ月後(4.33 $\pm$ 1.67点)であった。難渋例では、手術前で4点, 術後1ヶ月後で6点, 2ヶ月後で1点, 3ヶ月後で3点を記録し、両群ともにカットオフ値を下回った。さらに時間に伴う変化について統計処理を行った結果、POMS, CES-D, PSQIそれぞれにおいて有意性は認められなかった。一方、BDHQは軽快例では手術1ヶ月後においても摂取エネルギー量および3大栄養素(炭水化物, 脂質, タンパク質)の摂取量が増加したのに対し、難渋例では摂取エネルギー量が術後の時間の経過とともに減少し、3大栄養素においても手術前と比較し術後3ヶ月目では摂取量が減少した(図2)。

IV. 考察

本研究の結果から、軽快例において、緊張および不安感、自信喪失感を伴った抑うつ感、敵意と怒り、意欲や活力の低下・疲労感の心理状態に関わる項目で改善がみられ、理学的評価においてもリハビリテーションプロトコルに沿った改善がみられた。また、栄養面

では手術前と比べ摂取エネルギー、炭水化物、タンパク質、脂質の増加がみられた。一方で難渋例では、術後より関節可動域が改善しなかったことに加え、心理状態における各項目で改善がみられなかった。また、栄養面でも手術前に比べ低下がみられた。これらのことから、スポーツ傷害に対する術後の早期復帰には、心理面、栄養面の状態把握とそれらに対するアプローチが重要であることが示唆された。ゆえに、リハビリテーションプロトコルの遂行には、理学療法士、医師、医療従事者、家族と連携し、心理面、栄養面のサポートがリハビリテーションに加えて不可欠であることが考えられる。

心理面の評価に用いたPOMSにおいて、軽快例では、手術前に比べて術後より緊張や不安、抑うつや落込み、怒りや敵意、疲労、混乱の5因子の得点が減少した。とりわけ、術後1ヶ月以降、各項目ともに徐々に右肩下がりとなっている。術後1ヶ月までは痛みだけでなく病院での入院生活、退院後も免荷での生活、学校を休むなどといった社会との関わりが少なくなることが得点に影響していると考えられる。術後1ヶ月以降は痛みの軽減に加え、リハビリテーションプロトコル通りにトレーニングを進めていく中で日常生活動作も

改善していくことから、心理面の項目も改善していったことが考えられる。難渋例では、術後2ヶ月以降から緊張や不安、抑うつや落込み、怒りや敵意、疲労、混乱の5因子の得点が増加した。これは、術後に予定していたリハビリテーションプロトコルより遅延し、痛みも残存していたためと考える。さらに、術後2ヶ月以降も継続して高い得点となったため、「復帰の目処が立たないこと」に対する不安や「リハビリが順調に進まないこと」に対する怒りや焦りが表れていることが考えられる。

CES-Dにおいては、軽快例では術後から時間経過とともに点数が減少したのに対し、難渋例においても術後に一時的に減少したが、術後2ヶ月より増加した。これまでの大規模調査の結果から、CES-Dの点数は16点(カットオフ値)以上で抑うつの疑いがあることが報告されている(Irwin et al., 1999)。青年期のストレスと抑うつとの関連を調査した研究(小林ほか, 2005)では、CES-D得点16点以上の者は、家庭および学校でのストレスの自覚がある者と外的統制の強い者で有意に多かったことが報告されている。また、青年期の食事と抑うつとの関連について調査した研究(小林ほか, 2016)では、日本食パターンによる栄養素摂取量と抑うつ症状の間に負の関連があり、摂取した栄養素の複合的な働きが、抑うつ症状の防御要因として機能している可能性が報告されている。本研究では、軽快例、難渋例ともにCES-D得点は16点以下であり、両群ともカットオフ値以下であった。一方で、難渋例は継時的にみると術後2ヶ月で15点まで増加した。術後2ヶ月目は可動域の改善が停滞した時期であり、症状の改善がみられなかったことから、心理ストレスの増大、栄養素摂取量の減少との関連が考えられる。また、POMSにおいても術後2ヶ月目に抑うつや落込みに関する得点が悪化していることから、症状の改善が停滞した時期には、心理的ストレスを把握し、それに対する心理的アプローチも行っていく必要があると考える。これらのことから、早期復帰に向けた心理的なアプローチとして、理学療法士は患者とコミュニケーションを取りながら、関節可動域などの身体的変化だけでなく、不安や怒り、混乱などの心理的变化にも注意していくことが重要である。また、抑うつに関

しても早期にストレスに関連する事象を把握し、心理的なサポートを行っていくことが重要であると考えられる。しかし、本研究は心理的变化を調査したのみであるため、今後は心理的变化に対するアプローチの検証が必要であると考えられる。

睡眠の評価に用いたPSQIにおける総合得点は、本研究の調査対象者において手術前後で両群ともに睡眠障害者と評価される基準とされるカットオフ値(5.5点)よりも高値を示す時期が存在した。PSQIの得点は生活上のストレス体験、不安、ネガティブな認知的評価などに影響される(荒井ら, 2006; 加納ら, 2014)。このことから、両群ともに手術に関連するストレスや怪我によるネガティブな認知的評価、復帰への不安によって、PSQIの得点が高値を示したことが考えられる。ストレスに伴う睡眠障害は、無気力症といった軽度の精神疾患を生じさせることから(Baglioni et al., 2011)、睡眠の悪化は改善していく必要がある。しかし、両群ともに、2ヶ月目以降はカットオフ値以下に減少したことから、睡眠の質への影響は一時的なものだったと考えられる。

栄養面について軽快例では手術前と比較し、摂取エネルギー、3大栄養素(炭水化物、タンパク質、脂質)が増加しているのに対し、難渋例では、全てが減少していた。手術前の摂取カロリーが3047kcal/dayであるのに対し、術後3ヶ月目においては2041kcal/dayであり、手術前摂取カロリーの67%まで減少していた。厚生労働省が発行している日本人の食事摂取基準(2015年版)によると推定エネルギー必要量は2625kcal/dayであり(厚生労働省, 2015年)、本難渋例は摂取カロリーが不足していると考えられる。また3大栄養素の摂取量の全てが減少している事からも、特定の栄養素が不足しているのではなく、食事量自体が減少していると考えられ、食欲が落ちている可能性がある。

一方、軽快例では術後1ヶ月の摂取カロリーが手術前と比較し、167%と増加している。怪我により活動量も減少している事から、消費エネルギー量も減少していると考えられるが、今後摂取エネルギー量が高い状態が続けば、体重が増加する可能性がある。体重が増加すると膝への負担が増大し、膝に関する疾患のり

スクが高くなるため (Manninen et al., 2004), スポーツ摂取によって体重管理は非常に重要である。本研究の対象者は中高生であるため, 軽快例, 難渋例においても食事の把握, 管理が重要であると考えられる。

本研究は症例数が少なく, 特に難渋例はさらに症例数を増やしていくことが必要である。また, 統計処理の結果, それぞれの時間的変化に臨床的な有意性は認められなかった。しかし, 臨床現場において難渋例を経験することは少ないため, 本研究結果は重要な知見であると考えられる。また, 今回は術後における心理, 栄養面の状態把握を目的に行ったため, 実際にそれらに対するアプローチは行っていない。ゆえに今後は心理, 栄養面へのアプローチを行い, 早期復帰への関与を検証していくことが必要であると考えられる。

謝辞

本研究の一部は, 平成26年度京都滋賀体育学会活動助成事業の助成を受けて行われました。本研究の実施にあたり, ご協力いただいた病院, 診療所の先生, 指導者の方々, ならびに学生の皆さまには, 心より御礼申し上げます。また, 調査にご協力いただきました夏原梨沙氏 (豊郷病院) にこの場を借りまして感謝申し上げます。

参考文献

- 荒井弘和・中村友浩・木内敦詞・浦井良太郎 (2006) 主観的な睡眠の質と身体活動及び心理的適応との関連. 心身医学, 46 (7) : 667-676.
- Baglioni, C., Battagliese, G., Feige, B., Spiegelhalter, K., Nissen, C., Voderholzer, U., Lombardo, C., Riemann, D. (2011) Insomnia as a predictor of depression: a meta-analytic evaluation of longitudinal epidemiological studies. J Affect Disord., 135: 10-19.
- Barker, T., Leonard, S.W., Hansen, J., Trawick, R.H., Ingram, R., Burdett, G., Lebold, K.M., Walker, J.A., Traber, M.G. (2009) Vitamin E and C supplementation does not ameliorate muscle dysfunction after anterior cruciate ligament surgery. Free Radic Biol Med., 47 (11) : 1611-1618.
- Barker, T., Martins, T.B., Hill, H.R., Kjeldsberg, C.R., Trawick, R.H., Weaver, L.K., Traber, M.G. (2011) Low Vitamin D Impairs Strength Recovery After Anterior Cruciate Ligament Surgery. J Evid Based Complement Alternat Med., 16 (3) : 201-209.
- Buysee, D.J., Reynolds, C.F., Monk, T.H., Berman, S.R., Kupfer, D.J. (1989) The pittsburgh sleep quality index: a new instrument for psychiatric practice and research. Psychiatry Res., 28: 193-213.
- 土井由利子・簗輪眞澄・内山真・大川匡子 (1998) ピッツバーグ睡眠質問票日本語版の作成. 精神科治療学, 13: 755-763.
- Doi, Y., Minowa, M., Uchiyama, M., Okawa, M., Kim, K., Shibuki, K., Kamei, Y. (2000) Psychometric assessment of subjective sleep quality using the Japanese version of the Pittsburgh sleep quality index (PSQI-J) in psychiatric disordered and control subjects. Psychiatr Res., 97: 165-172.
- Hewett, T.E., Lindenfeld, T.N., Riccobene, J.V., Noyes, F.R. (1999) The effect of neuromuscular training on the incidence of knee injury in female athletes. Am J Sports Med., 27 (6) : 699-706.
- 加納友香・石橋知幸・土居礼佳 (2014) 大学生の生活上のストレス, 神経症傾向, 不眠へのこだわりが睡眠の質に及ぼす影響およびそれらの精神的な健康への影響度. 日本看護研究学会雑誌, 37 (4) : 1-10.
- 小林幸太・小林玲子・久保清香・園田智子・森満 (2005) 抑うつ症状とその関連要因についての検討 北海道内の一短期大学における調査から. 日本公衆誌第1号, 52: 55-65.
- 小林道・上田積・千田奈々 (2016) 女子大学生における日本食パターンと抑うつ症状の関連. 栄養学雑誌, 74 (5) : 141-147.
- Komada, Y., Inoue, Y. (2007) 睡眠障害の社会生活に及ぼす影響. Jpn J Psychosom Med., 47: 785-791.
- MacKay, D., Miller, A.L. (2003) Nutritional support for wound healing. Altern Med Rev., 8 (4) : 359-377.
- Manninen, P., Riihimäki, H., Heliövaara, M.,

- Suomalainen, O. (2004) Weight changes and the risk of knee osteoarthritis requiring arthroplasty. *Ann Rheum Dis.*, 63 (11) : 1434-1437.
15. 日本整形外科学会／日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会監修 (2012) 前十字靱帯 (ACL) 損傷診療ガイドライン改訂第2版. 日本整形外科学会診療ガイドライン委員会, 前十字靱帯 (ACL) 損傷診療ガイドライン策定委員会編. 南江堂: 東京, pp. 165-169.
16. 日本スポーツ心理学会編 (2005), スポーツメンタルトレーニング教本. 大修館書店: 東京. pp. 42-45.
17. 高尾理樹夫・堀部秀二・川上由紀子・山下絵美・草野雅司・岩田秀治・永田武豊・塩崎嘉樹 (2014) スポーツ選手の膝前十字靱帯再建術後の栄養調査2症例報告. 関西臨床スポーツ医・科学研究会誌, 23: 47-49.
18. Tatsumi, T., Takenouchi, T. (2014) Causal relationships between the psychological acceptance process of athletic injury and athletic rehabilitation behavior. *J Phys Ther Sci.*, 26 (8) : 1247-1257.
19. Xu, Z.R., Tan, Z.J., Zhang, Q., Gui, Q.F., Yang, Y.M. (2014) Clinical effectiveness of protein and amino acid supplementation on building muscle mass in elderly people: a meta-analysis. *PLoS One.*, 9 (9) : e109141.

(2017年2月13日受付, 2017年6月6日受理)

京都滋賀体育学会だより No.40

<http://www.kyoto-taiiku.com>

I 平成28年度事業報告

1. 第146回京都滋賀体育学会大会

日時：2017年3月5日（日）

会場：龍谷大学深草学舎 和顔館 B201教室

大会会長：長谷川 裕（龍谷大学教授）

大会事務局：松永敬子（龍谷大学教授）

一般研究発表セッション1 9:40 10:52 和顔館 B201教室

座長：上林清孝（同志社大学）

01 400m 走競技選手における足趾骨長と競技パフォーマンスの関連

富田大智（立命館大学スポーツ健康科学部），菅唯志（立命館大学スポーツ健康科学部），
田中貴大（立命館大学スポーツ健康科学研究科），上野弘聖（立命館大学スポーツ健康科学部），
三宅悠斗（立命館大学スポーツ健康科学研究科），大塚光雄（立命館大学スポーツ健康科学部），
長野明紀（立命館大学スポーツ健康科学部），伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部）

02 野球競技者における体幹筋の左右非対称性は投打の同側競技者に比較して逆側競技者において抑制される

小山田悠希（立命館大学スポーツ健康科学部），菅唯志（立命館大学スポーツ健康科学部），
和智道生（立命館大学スポーツ健康科学研究科），御前純（立命館大学スポーツ健康科学研究科），
土金諒（立命館大学スポーツ健康科学研究科），堀美幸（摂南大学），樋口貴俊（福岡工業大学），
伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部）

03 実践を想定したトス打撃におけるバットスイング動作の解析

佐伯紘道（立命館大学スポーツ健康科学部），土金諒（立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科），
御前純（立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科），伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部）

04 小学生の発達段階に応じた疾走能力を決定する要因の検証－発達段階に応じた学習課題の検討－

萬玲奈（京都教育大学），小山宏之（京都教育大学）

05 多様な設定条件のハードル走におけるハードリング動作への影響－小学校 6 年生を対象にした新たな指導法の提案－

久保理英（京都教育大学大学院），小山宏之（京都教育大学），柴田篤志（京都教育大学）

06 小学校体育科における投能力向上プログラムの開発と効果に関する研究

山田淳子（滋賀大学大学院），辻延浩（滋賀大学）

一般研究発表セッション2 11:00 12:00 和顔館 B201教室

座長：大西孝之(龍谷大学)

- 07 体育授業において学びを深めるための ICT 活用方法の検討と活用マニュアルの作成ー iPad の活用に着目してー
萩原美帆(京都教育大学), 中比呂志(京都教育大学)
- 08 ビデオを活用した教育実習授業リフレクションシステムの開発
道満晶子(京都教育大学), 中比呂志(京都教育大学)
- 09 小学校から高等学校における安全教育の系統的指導内容の検討ー生活安全領域に着目してー
新津香織(京都教育大学), 中比呂志(京都教育大学)
- 10 民間委託方式を導入した学校運動部活動の現状と課題
奥田直希(京都教育大学), 中比呂志(京都教育大学)
- 11 高等学校体育授業における観点別評価の重要性と運用および総括方法について
富永寛隆(滋賀県立八幡商業高等学校), 芝崎学(奈良女子大学)

一般研究発表セッション3 13:00 14:00 和顔館 B201教室

座長：満石 寿(京都学園大学)

- 12 運動指導者は「見立てのズレ」をどのように指導に役立てるのかーメディカルフィットネスクラブへのフィールドワークを通じてー
古田翔一(びわこ成蹊スポーツ大学大学院), 豊田則成(びわこ成蹊スポーツ大学)
- 13 スポーツ少年団指導者の指導観の形成過程に関する研究ー M-GTA を用いた質的アプローチー
藤村壮(びわこ成蹊スポーツ大学大学院), 豊田則成(びわこ成蹊スポーツ大学)
- 14 チームマネジメントによる妬み緩和条件の検討
荒木貴仁(立命館大学スポーツ健康科学研究科), 山浦一保(立命館大学スポーツ健康科学部)
- 15 女性スポーツ指導者登用促進のための社会心理的要因の検討ーサッカー指導者の指導意識とジェンダー意識に着目してー
佐藤馨(びわこ成蹊スポーツ大学), 望月聡(びわこ成蹊スポーツ大学)
- 16 ことばとうごきの関係ー言語的な動作指示の違いがジャンプのパフォーマンスに及ぼす影響ー
北尾浩和(京都きづ川病院, 京都工芸繊維大学大学院), 来田宣幸(京都工芸繊維大学),
中本隆幸(京都きづ川病院), 深田智(京都工芸繊維大学), 小島隆次(滋賀医科大学),
萩原広道(京都大学大学院), 山田勝真(蘇生会総合病院), 野村照夫(京都工芸繊維大学)

一般研究発表 セッション4 14:10 15:10 和顔館 B201教室

座長：河合美香(龍谷大学)

- 17 水平面上における様々な方向への外乱に対する姿勢制御
久保陽(京都大学人間・環境学研究科), 岡田晃(京都大学総合人間学部),
神崎素樹(京都大学人間・環境学研究科)
- 18 手掌筋厚と全身筋量の関連ー健常若年者を対象としたパイロット研究ー
森本晃央(立命館大学スポーツ健康科学部), 菅唯志(立命館大学スポーツ健康科学部),
鳥取伸彬(立命館大学スポーツ健康科学研究科), 和智道生(立命館大学スポーツ健康科学研究科),

- 御前純(立命館大学スポーツ健康科学研究科), 土金諒(立命館大学スポーツ健康科学研究科),
小山田悠希(立命館大学スポーツ健康科学部), 伊坂忠夫(立命館大学スポーツ健康科学部)
- 19 中学生の体の柔軟性および体の痛みの自覚症状とスポーツ経験の長さ
馬場雅貴(滋賀県立大学), 宮本光司(滋賀県立大学), 肥田嘉文(滋賀県立大学),
増田清敬(滋賀県立大学), 寄本明(京都女子大学)
- 20 学年別による女子大学生の身体活動量評価ー2年生と4年生の比較ー
小熊紗代子(大阪国際大学人間科学部), 喜多野宣子(大阪国際大学人間科学部),
小森康加(大阪国際大学人間科学部)
- 21 バスケットボールのボールを保持する場面における個人技術の利用実態についてー日本, 中
国, アメリカにおける3国間の比較ー
張東超(立命館大学スポーツ健康科学研究科), 岡本直輝(立命館大学スポーツ健康科学研究科)

講演 15:25 16:10 和顔館 B201教室

演題:「生活習慣病・うつ病予防のためのラジオ体操第三の役割」

井上辰樹氏(龍谷大学 社会学部 教授) 2. 平成28年度京都滋賀体育学会総会

2. 平成28年度京都滋賀体育学会総会

日時: 2017年3月5日(日)

会場: 龍谷大学深草学舎 和顔館 B201教室

(1)審議事項1: 平成27年度事業報告

①第146回京都滋賀体育学会大会

2017年3月5日(日) 於: 龍谷大学深草学舎 和顔館 B201教室

②第146回京都滋賀体育学会総会

2017年3月5日(日) 於: 龍谷大学深草学舎 和顔館 B201教室

③京都滋賀体育学会理事会(6回)

第1回: 2016年4月26日(火) 於: キャンパスプラザ京都

第2回: 2016年6月14日(火) 於: キャンパスプラザ京都

第3回: 2016年10月11日(火) 於: キャンパスプラザ京都

第4回: 2016年12月20日(火) 於: キャンパスプラザ京都

第5回: 2017年2月14日(火) 於: キャンパスプラザ京都

第6回: 2017年3月5日(日) 於: 龍谷大学深草学舎

④地域連携企画: 滋賀県地域スポーツ指導者研修会

滋賀県地域スポーツ指導者研修会(参加者: 120名)

2016年9月10日 於: 立命館大学 BKC (81名)

2016年9月17日 於: 長浜バイオ大学ドーム (39名)

主催: 滋賀県教育委員会・滋賀県体育協会・滋賀県広域スポーツセンター

⑤京都滋賀体育学研究第32巻発行(2016年7月)

⑥京都滋賀体育学会学術推進事業

平成28年度学会賞(奨励論文賞)

平本真知子氏(京都府立医科大学附属病院)

原著論文:女子プロ野球選手における身体機能とパフォーマンス及びスポーツ障害との関係

平成28年度若手研究奨励賞

最優秀賞:荒木貴仁氏ほか(立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科)

チームマネジメントによる妬み緩和条件の検討

優秀賞:北尾浩和氏ほか(京都きづ川病院・京都工芸繊維大学大学院)

ことばとうごきの関係～言語的な動作指示の違いがジャンプのパフォーマンスに及ぼす影響～

優秀賞:久保 陽氏ほか(京都大学大学院人間・環境学研究科)

水平面上における様々な方向への外乱に対する姿勢制御

⑦京都滋賀体育学会研究集会(0件)

(2)審議事項2:平成27年度決算報告

①一般会計(別紙)

②特別会計(別紙)

③会計監査報告

一般会計・特別会計:一括報告(芳田監事・中監事)

(3)審議事項3:日本体育学会協力学会の申請について

(4)審議事項4:平成28年度事業計画案

①第147回京都滋賀体育学会大会(2018年3月開催予定・開催予定大学:京都学園大学)

②京都滋賀体育学会総会(学会大会と同時開催)

③京都滋賀体育学会理事会

④京都滋賀体育学会大会講演会・実践研究会・地域連携企画

⑤京都滋賀体育学研究第33巻発行(2017年7月予定)

⑥京都滋賀体育学会学術推進事業(奨励論文賞・若手研究奨励賞)

⑦京都滋賀体育学会研究集会活動

⑧平成30-31年度京都滋賀体育学会役員選挙

(5)審議事項5:平成28年度予算案

①一般会計案

別紙

(6)審議事項6:京都滋賀体育学会会則の一部改正

会費 正会員年額 2,000円

購読会員年額 1,000円 →削除

臨時会員費 1,000円

なお、日本体育学会会員は定められた会費がこれに加わる。

平成29年4月1日 一部改正

(7)報告事項

①会員動向

2014年3月1日現在 356名

2015年3月1日現在 332名

2016年3月1日現在 311名

2017年3月1日現在 315名

②京都府スポーツ賞表彰

中井誠一 氏(京都滋賀体育学会 前会長)



3. 平成28年度京都滋賀体育学会理事会

第1回：2016年4月26日(火) 18時30分

於：キャンパスプラザ京都 立命館大学サテライトオフィス

報告

1. 平成28・29年度新役員の紹介
2. 地域のあり方について
3. その他

議題

1. 平成27年度第6回理事会議事録の確認
2. 平成28年度京都滋賀体育学会活動方針ならびに事業計画について
3. 平成28年度役員の役割と業務の引き継ぎ及び活動計画について
4. 学会誌・学会たよりの発刊に向けた作業状況について
5. 理事会開催予定について
6. その他

第2回：2016年6月14日（火） 18時30分

於：キャンパスプラザ京都 立命館大学サテライトオフィス

報告

1. その他

議題

1. 平成28年度第1回理事会議事録の確認
2. 学会誌及び学会たより発刊に際する原稿の集約・編集作業の進捗状況確認
3. 日本体育学会における「地域のあり方」についての意見集約
4. 講演会・実践研究会・研究集会に関する情報集約
5. 役員選出規程に関する検討
6. 理事会におけるメール審議の規程に関する検討
7. その他

第3回：2016年10月11日（火） 18時30分

於：キャンパスプラザ京都 立命館大学サテライトオフィス

報告

1. 講演会・実践研究会・研究集会に関する報告
2. 会員の動向
3. その他

議題

1. 平成28年度第2回理事会議事録の確認
2. 日本体育学会における「地域のあり方」について
3. 会員の名簿管理について
4. 第146回学会大会の開催
5. その他

第4回：2016年12月20日（火） 18時30分

於：キャンパスプラザ京都 立命館大学サテライトオフィス

報告

1. その他

議題

1. 平成28年度第3回理事会議事録の確認
2. 名誉会員の推薦について
3. 協力学会の申請について
4. 地域学会との連携（大阪・和歌山）について
5. 第146回学会大会の開催
6. その他

第5回：2017年2月14日（火） 18時30分

於：キャンパスプラザ京都 立命館大学サテライトオフィス

報告

1. 京都府スポーツ賞スポーツ功労賞について
2. 第146回学会大会の開催について
3. その他

議題

1. 平成28年度第4回理事会議事録の確認
2. 日本体育学会協力学会申請について
3. 2016年度事業報告案について
4. 2016年度決算報告案について
5. 2017年度事業計画案について
6. 2017年度事業予算案について
7. その他

第6回：2017年3月5日（日） 12時10分

於：龍谷大学深草学舎 和顔館

報告

1. その他

議題

1. 平成28年度第5回理事会議事録の確認
2. 京都滋賀体育学会第147回大会の開催について
3. 2016年度奨励論文賞の選考結果について
4. 京都滋賀体育学会会則の一部改正について
5. 平成28年度京都滋賀体育学会総会の議案について
6. その他

別紙

平成28年度決算報告

1. 一般会計収支計算書(2016年3月1日～2017年2月28日)

収入	予算額	決算額	備考
会費	640,000	543,000	
	40,000	28,000	臨時会員:1,000円×28人(第145回大会参加費)
学会本部補助金	97,000	97,000	
広告協賛金	100,000	40,000	
合計	877,000	708,000	(A)
支出	予算額	決算額	備考
学会事業費			
・学会大会総会	140,000	128,000	学会大会・総会:128,000円(第145回大会)
・研究集会	150,000	-	研究集会:0件
・学会賞費	50,000	80,000	発表賞:2万円×1件、1万円×3件、論文賞:3万円×1件
・印刷費	300,000	228,482	学会誌(第32巻)印刷発送経費
学会運営費			
・編集委員会費	30,000	4,536	郵送費
・会計費	5,000	1,452	振込手数料・郵便通信費
・庶務費	60,000	2,110	文具
・広報費	30,000	-	
予備費	112,000		
合計	877,000	444,580	(B)

繰越金	701,495	1,049,721	
単年度収支	-	263,420	(A)-(B)
次年度繰越金		1,313,141	

以上、相違ありません。

監査 中比呂志

芳田哲也

2. 特別会計収支計算書(2016年3月1日～2017年2月28日)

収入	決算額
繰越金	343,271
利息	34
合計	343,305
支出	決算額
合計	-
次年度繰越金	343,305

以上、相違ありません。

監査 中比呂志

芳田哲也

【別紙2】

平成29年度一般会計予算案

一般会計

収入

費目	予算額
会費	600,000
臨時会員会費(学会大会参加費)	30,000
学会本部補助金	97,000
広告協賛金	50,000
合計	777,000

支出

費目	予算額
学会事業費	
・学会大会・総会	140,000
・研究集会等補助金	150,000
・学会賞費	50,000
・印刷費	300,000
学会運営費	
・編集委員会費	20,000
・会計費	5,000
・庶務費	20,000
・役員選挙経費	60,000
・広報費	20,000
予備費	12,000
合計	777,000

収支

	予算額
繰越金	1,313,141
単年度収支	－
次年度繰越金	1,313,141

昭和27年 7 月 5 日	制定施行
昭和37年 6 月 9 日	改正
昭和41年 6 月 6 日	改正
昭和49年 4 月 1 日	一部改正
昭和54年 4 月 1 日	一部改正
昭和55年 4 月 1 日	一部改正
昭和60年 4 月 1 日	一部改正
昭和62年 4 月 1 日	一部改正
平成 5 年 4 月 1 日	一部改正
平成 9 年 4 月 1 日	一部改正
平成10年 4 月 1 日	一部改正
平成19年 4 月 1 日	一部改正
平成23年 4 月 1 日	一部改正
平成24年 4 月 1 日	一部改正
平成25年 4 月 1 日	一部改正
平成26年 4 月 1 日	一部改正
平成29年 4 月 1 日	一部改正

京都滋賀体育学会会則

1. 総 則

1. この会を京都滋賀体育学会 (Kyoto and Shiga Society of Physical Education, Health and Sport Sciences) と称する。
この会は日本体育学会京都滋賀地域を兼ねる。
2. この会は体育に関するあらゆる科学的研究をなし、体育学の発展を図り、体育の実践に寄与することを目的とする。

2. 会 員

3. この会は前条の目的に賛同する個人および団体をもって組織する。
4. 会員は正会員、購読会員および臨時会員とする。正会員になるには正会員の紹介と理事会の承認を要する。
臨時会員の資格は、資格取得の当該年度内のみとする。
5. 会員が退会しようとするときは、退会届を会長に提出しなければならない。
6. 会員が次のいずれかに該当するに至ったときは、理事会の議決を経て、会長が除名することができる。
(1) 本学会の名誉を傷つけ、又は目的に違反する行為があったとき
(2) 本学会の会員としての義務に違反したとき
(3) 会費を2年以上滞納したとき
7. 会員は、次の事由によってその資格を喪失する。
(1) 退会したとき (2) 死亡し、または失踪宣言を受けたとき (3) 除名されたとき

3. 機 関

8. この会の運営は次の機関による。
(1) 総 会 (2) 理事会
9. 本会には次の役員を置く。
会長 1 名、副会長 2 名、常務理事 1 名を含む10名以上の理事および監事 2 名
10. 会長、副会長、理事、監事は正会員より別に定める方法により選出する。
11. 総会は、会長の召集の下に毎年 1 回開催し、当日の出席会員をもって構成する。
12. 総会、理事会の議事は出席者の過半数をもって決する。
13. 理事会は会長、副会長、理事を以って構成し、常務理事は議長となる。
理事会は会長がこれを招集する。

14. 会長は、会を代表し会務を総括する。副会長は、会長に事故ある時はその任務を代行し、会を運営する。常務理事は、会および理事会を運営する。理事は、会務を遂行する。監事は、理事の職務の執行を監査し、理事に対して事業の報告を求め会務の状況を調査することができる。
15. 理事会は、会計理事、庶務理事、渉外理事等を選出し、各理事の役割を明確にする。
16. 役員の任期は2年とする。但し重任を妨げない。
17. 本会は総会の承認を得て、顧問および名誉会員を置くことができる。

4. 事 業

18. この会の目的を達成するために次の事業を行う。
 - (1) 学会大会の開催
 - (2) 講演会等の開催
 - (3) 機関誌「京都滋賀体育学研究」の刊行
 - (4) その他この会の目的に資する諸事項
19. 学会大会は毎年1回以上これを開き、研究成果の発表を行う。
20. 機関誌「京都滋賀体育学研究」の編集は編集委員が担当する。

5. 会 計

21. この会の経費は次の収入によって支出する。
 - (1) 会員の入会金および会費
 - (2) 事業収入
 - (3) 他より助成金および寄付金
22. 入会金および会費の額は別に記す。名誉会員は会費を免除する。
23. この会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月末日とする。

6. 附 則

24. この会の所在地および事務局は原則として常務理事の所属する学校に置く。
25. この会の会則は総会の議決により変更することができる。
26. この会則は、平成29年4月1日から実施する。

記

入会金 500円(日本体育学会員となる場合には1,000円とし、その半額を京都滋賀地域が受ける)

会費 正会員年額 2,000円

臨時会員費 1,000円

なお、日本体育学会会員は定められた会費がこれに加わる。

京都滋賀体育学会事務局

〒525-8577 草津市野路東1-1-1 立命館大学スポーツ健康科学部

岡本 直輝(京都滋賀体育学会会長)

TEL: 077-561-4887, E-mail: naok-o@ba.ritsumei.ac.jp

郵便振替口座番号 01070-7-23829

他金融機関からの振込の場合

ゆうちょ銀行 一〇九(イチゼロキュウ)店 当座 0023829

加入者名: 京都滋賀体育学会

*退会・転出・転入・通勤先変更・転居等については、日本体育学会事務局へ直接届けると共に、京都滋賀体育学会事務局までご連絡ください。

平成24年 3月 3日 制 定
平成25年 4月 1日 一部改正
平成28年 3月13日 一部改正
平成28年 6月13日 一部改正

役員選出方法に関する規程

(目的)

1. 会則9条による役員選出を円滑にならしめるために本規定を定める。

(選挙管理委員会)

2. 会長は正会員(名誉会員及び顧問を除く)の中から、選挙管理委員を若干名委嘱し、選挙に関する事務処理をおこなうための選挙管理委員会を組織する。
3. 選挙管理委員会は、互選により委員長および副委員長を各1名選出する。

(被選挙権、選挙権の付与)

4. 役員選挙に関する被選挙権は役員任期満了年度の前年度会員であり、当該役員選挙投票締切日において、引き続き正会員(名誉会員及び顧問を除く)である者に付与される。
5. 役員選挙に関する選挙権は、当該選挙開始6ヶ月前までの正会員(名誉会員及び顧問を除く)に付与される。

(理事の選出)

6. 理事には会員選出理事および会長推薦理事をおくものとする。会員選出理事の選挙は、正会員(名誉会員及び顧問を除く)の書面(郵送)投票によるものとし、選出定数を8名とする。
7. 投票は、予め送付した投票用紙を用いて、8名を記し、指定の期日までに到着したものをもって有効とする。
8. 理事の当選者はそれぞれ得票数の順により、上位から定数までとする。同点者が生じた場合は、年少の者とする。

(会長、副会長、常務理事、会長推薦理事、監事の選出)

9. 現会長は、選挙に選ばれた新理事を召集する。そして次期会長・副会長・常務理事は選挙により選出された理事による互選で決定する。
10. 会長は、会長推薦理事を若干名と監事2名を推薦し、選挙により選ばれた理事の承認を得るものとする。
11. 会長の連続しての任期は3期までとする。

京都滋賀体育学会研究集会に関する規程

1. (目的) 京都滋賀体育学会の正会員は次に定める項目を目的として、研究集会を開催できる。
 - 1) 体育・スポーツに関する専門分野の研究促進
 - 2) 他研究分野・他学会との連携
 - 3) 学会員の研究室に所属する学生・院生・研究生の交流の場に対する教育支援
2. (補助金) 京都滋賀体育学理事会が承認した研究集会には学会共催として30,000円を上限として補助する。
3. (開催手続き) 研究集会は、2名以上の正会員が世話人となり、所定の様式(別紙1)に目的、内容(研究発表会、講演会、実験研修会など)、実施日時および場所、参加予定者を記入し、開催日の3ヶ月前までに京都滋賀体育学会常務理事宛に申請書を提出すること。研究集会は当該年度の2月末日までに1回程度開催する。
4. (選考方法) 京都滋賀体育学会理事会にて審議し、承認する。
5. (報告の義務) 世話人は、研究集会の講演または発表者、参加者、補助金の使用状況等を明記した書面(別紙2)にて当該年度の2月末日までに京都滋賀体育学会理事会に報告し、理事会は研究集会の内容を京都滋賀体育学会総会にて報告する。期日までに理事会への報告がない場合は補助金の返還を求める場合がある。

以上

平成17年3月5日 制定施行
平成25年3月8日 制定施行
平成26年4月1日 一部改正
平成28年6月13日 一部改正

京都滋賀体育学会賞選考規程

京都滋賀体育学会賞を若手研究奨励賞、論文賞の二部門について定め、以下の選考方法にて決定する。表彰は原則として定例の京都滋賀体育学会総会にて行う。

1. 若手研究奨励賞：若手研究者（演者）の優秀な発表について表彰する。

選考方法：定例の京都滋賀体育学会にて発表された学部生及び大学院生の演者の中から選考し、理事会が決定する。賞状ならびに副賞を授与する。

2. 奨励論文賞：今後の発展が期待できる研究論文について表彰する。

選考方法：各年度の京都滋賀体育学研究に掲載された論文（原著・資料・実践研究・報告）の中から、目的・方法が明確で今後の発展が期待できる研究内容について、学会賞選考委員会（以下、選考委員会）が決定し理事会が承認する。論文賞の決定方法については選考委員会に一任し、選考委員長は決定方法を会員に公表する。尚、選考委員長以外の選考委員の名前は会員に公表しない。賞状ならびに副賞を授与する。

以上

京都体育学会および京都滋賀体育学会 歴代会長・副会長・理事長

平成24年度～ 京都滋賀体育学会に移行

会 長			副 会 長			理 事 長		
氏 名	主たる職	在任期間	氏 名	主たる職	在任期間	氏 名	主たる職	在任期間
川畑 愛義	京都大学 教授	昭27.7～ 昭35.3	木村 静雄	立命館大学 教授	昭27.7～ 昭33.3	木村 静雄	立命館大学 教授	昭27.7～ 昭35.3
田 渕 潔	同志社大学 教授	昭35.4～ 昭41.3	田 渕 潔	同志社大学 教授	昭33.4～ 昭35.3	高木公三郎	京都大学 教授	昭35.4～ 昭41.3
高木公三郎	京都大学 教授	昭41.4～ 昭49.3	横川 隆範	京都学芸 大学教授	昭33.4～ 昭35.3	山岡 誠一	京都教育 大学教授	昭41.4～ 昭47.3
木村 静雄	立命館大学 教授	昭49.4～ 昭51.3	川端 愛義	京都大学 教授	昭35.4～ 昭39.3	万井 正人	京都大学 教授	昭47.4～ 昭49.3
田村 喜弘	京都大学 教授	昭51.4～ 昭53.3	木村 静雄	立命館大学 教授	昭35.4～ 昭49.3	末利 博	京都教育 大学教授	昭49.4～ 昭53.3
末利 博	京都教育 大学教授	昭53.4～ 昭55.3	近藤 博	京都学芸 大学教授	昭39.4～ 昭47.3	山田 敏男	京都工芸織 維大学教授	昭53.4～ 昭55.3
山岡 誠一	京都教育 大学教授	昭55.4～ 昭57.3	山岡 誠一	京都教育 大学教授	昭47.4～ 昭55.3	蜂須賀弘久	京都教育 大学教授	昭55.4～ 昭57.3
万井 正人	京都大学 教授	昭57.4～ 昭59.3	万井 正人	京都大学 教授	昭和49.4～ 昭57.3	伊藤 稔	京都大学 教授	昭57.4～ 昭61.3
竹内 京一	京都教育 大学教授	昭59.4～ 昭61.3	蜂須賀弘久	京都教育 大学教授	昭57.4～ 昭61.3	横山 一郎	京都教育 大学教授	昭61.4～ 昭63.3
蜂須賀弘久	京都教育 大学教授	昭61.4～ 昭63.3	山田 敏男	京都工芸織 維大学教授	昭57.4～ 昭61.3	佐藤 陽吉	京都女子 大学教授	昭63.4～ 平4.3
倉敷 千稔	同志社大学 教授	昭63.4～ 平4.3	伊藤 稔	京都大学 教授	昭61.4～ 平4.3	小野 桂市	京都工芸織 維大学教授	平4.4～ 平8.3
川井 浩	京都大学 教授	平4.4～ 平10.3	倉敷 千稔	同志社大学 教授	昭61.4～ 昭63.3	田口 貞善	京都大学 教授	平8.4～ 平10.3
田口 貞善	京都大学 教授	平10.4～ 平16.3	横山 一郎	京都教育 大学教授	昭63.4～ 平8.3	中村榮太郎	京都大学 教授	平10.4～ 平12.3
森谷 敏夫	京都大学 教授	平16.4～ 平22.3	佐藤 陽吉	京都女子 大学教授	平4.4～ 平6.3	寺田 光世	京都教育 大学教授	平12.4～ 平16.3
中井 誠一	京都女子 大学教授	平22.4～ 平24.3	瀬戸 進	大谷大学 教授	平6.4～ 平8.3	中井 誠一	京都女子 大学教授	平16.4～ 平18.3
岡本 直輝	立命館大学 教授	平24.4～	藤田 登	同志社大学 教授	平8.4～ 平14.3	岡本 直輝	立命館大学 教授	平18.4～ 平22.3
			八木 保	京都大学 教授	平8.4～ 平12.3	中 比呂志	京都教育大 学教授	平22.4～ 平25.3
			中村榮太郎	京都大学 教授	平12.4～ 平16.3	常務理事(平成25年度改正)		
			野原 弘嗣	京都教育 大学教授	平14.4～ 平16.3	中 比呂志	京都教育大 学教授	平25.4～ 平28.3
			寺田 光世	京都教育 大学教授	平16.4～ 平18.3	長積 仁	立命館大学	平28.4～
			小田 伸午	京都大学 教授	平16.4～ 平22.3			
			中井 誠一	京都女子 大学教授	平18.4～ 平22.3			
			岡本 直輝	立命館大学 教授	平22.4～ 平24.3			
			芳田 哲也	京都工芸織 維大学准教授	平22.4～ 平28.3			
			野村 照夫	京都工芸織 維大学教授	平24.4～ 平26.3			
			真田 樹義	立命館大学 教授	平26.4～			
			野村 照夫	京都工芸織 維大学教授	平28.4～			

近年の学会大会開催大学

平成24年度～ 京都滋賀体育学会に移行

年 度	回	開 催 大 学
平成8年度	120回	滋賀大学
	121回	ノートルダム女子大学
	122回	立命館大学(衣笠)
平成9年度	123回	京都府立大学
	124回	京都大学
平成10年度	125回	龍谷大学
	126回	京都大学
平成11年度	127回	同志社大学
	128回	京都女子大学
平成12年度	129回	京都外国語大学
	130回	京都教育大学
平成13年度	131回	光華女子大学
平成14年度	132回	大谷大学
平成15年度	133回	立命館大学(草津)
平成16年度	134回	京都工芸繊維大学
平成17年度	135回	京都薬科大学
平成18年度	136回	京都大学
平成19年度	137回	龍谷大学
平成20年度	138回	同志社大学
平成21年度	139回	京都教育大学
平成22年度	140回	京都女子大学
平成23年度	141回	びわこ成蹊スポーツ大学
平成24年度	142回	京都ノートルダム女子大学 京都工芸繊維大学
平成25年度	143回	京都大学
平成26年度	144回	立命館大学
平成27年度	145回	同志社大学(今出川)
平成28年度	146回	龍谷大学(深草)

京都滋賀体育学会役員

名 誉 会 員	竹 内 京 一	(京 都 教 育 大 学 名 誉 教 授)
	倉 敷 千 稔	(同 志 社 大 学 名 誉 教 授)
	武 部 吉 秀	(京 都 大 学 名 誉 教 授)
	伊 藤 稔	(京 都 大 学 名 誉 教 授)
	伊 藤 一 生	
	小 西 博 喜	
	八 木 保	(京 都 大 学 名 誉 教 授)
	田 口 貞 善	(京 都 大 学 名 誉 教 授)
	野 原 弘 嗣	(京 都 教 育 大 学 名 誉 教 授)
	寺 田 光 世	(京 都 教 育 大 学 名 誉 教 授)
顧 問	大 山 肇	(京 都 外 国 語 大 学 名 誉 教 授)
	岡 尾 恵 市	(立 命 館 大 学 名 誉 教 授)
	小 野 桂 市	(京 都 工 芸 繊 維 大 学 名 誉 教 授)
	森 谷 敏 夫	(京 都 大 学 名 誉 教 授)
	岡 本 直 輝	(立 命 館 大 学) …… 地域連携・企画
	野 村 照 夫	(京 都 工 芸 繊 維 大 学) …… 学術誌編集
	真 田 樹 義	(立 命 館 大 学) …… 学術誌編集・広報渉外
	長 積 仁	(立 命 館 大 学) …… 庶務統括
	来 田 宣 幸	(京 都 工 芸 繊 維 大 学) …… 会計
	竹 田 正 樹	(同 志 社 大 学) …… 研究促進・企画
常 務 理 事	神 崎 素 樹	(京 都 大 学) …… 広報渉外
	松 永 敬 子	(龍 谷 大 学) …… 庶務・学会大会
	佃 文 子	(びわこ成蹊スポーツ大学) …… 地域連携
	上 林 清 孝	(同 志 社 大 学) …… 広報渉外
	満 石 寿	(京 都 学 園 大 学) …… 企画
監 事	芳 田 哲 也	(京 都 工 芸 繊 維 大 学)
	中 比呂志	(京 都 教 育 大 学)

平成 24 年 4 月 1 日一部改訂

平成 26 年 4 月 1 日一部改訂

「京都滋賀体育学研究」編集・投稿規定

1. 「京都滋賀体育学研究」（英文名 Kyoto and Shiga Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences 以下本誌）は、京都滋賀体育学会の機関誌であり年一回以上発行する。
2. 本誌は本学会会員の体育・スポーツに関する論文の発表にあてる。編集委員会が認めた場合には会員以外に寄稿を依頼することもできる。
3. 1 編の論文の長さは本誌 8 ページ以内とする。ただし短報については 3 ページ以内とする。
4. 原稿は、所定の執筆要項に準拠して作成し、総説、原著論文、資料、実践研究、短報の別を指定して編集委員会事務局あてに提出する。原稿は Word または PDF ファイルとする。電子ファイルをメール添付もしくは CD で提出する。
5. 投稿論文は、学術論文としてふさわしい内容と形式をそなえたものであり、人権擁護・動物愛護について配慮され、かつ未公開のものでなければならない。
6. 投稿論文は編集委員会が審査し、その掲載の可否を決定する。
7. 原稿の印刷において規程のページ数を超過した場合、あるいは、図版・写真などとくに費用を要するものは、その実費を執筆者の負担とする。
8. 別刷は校正時に希望部数を申し出ること。実費により希望に応じる。
9. 本誌の編集事務についての連絡は、「京都滋賀体育学研究」編集委員会事務局あてとする。
10. 編集委員会は理事会において編成する。
11. 掲載された原稿の著作権は本会に帰する。

執筆要項

1. 論文の長さは、文献・図表・abstractを含め8ページ(12000字)までとする。但し超過した場合その費用は執筆者負担とする。なお、短報については3ページ以内(4500字)とし、abstractは100語程度、図表や引用文献は精査して必要最小限に抑えて(図表は1～2つ程度)紙面を取りすぎないようにする。

2. 本誌論文の原稿執筆にあたっては、下記の事項を厳守されたい。

- (1) 原稿は、ワードプロセッサ(A4判縦置き横書き、40字×30行、10枚、余白上下左右各3cm、フォント10.5ポイント)により作成し提出する。

原稿は、1枚目：題目・英文標題を記し副題をつける場合にはコロン(:)で続ける。英文タイトルの最初の単語は品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にする。その他は固有名詞など、特に必要な場合以外はすべて小文字とする。

2枚目：著者名とそのローマ字名、著者の所属名とその正式英語名及び所在地(英文字)、所属の異なる2人以上の場合著者名の右肩に*、**、…印を付して、脚注に*、**、…印ごとに所属名とその正式英語名及び所在地(英文字)。大学の所属が学部の場合は学部名を、大学院の場合は研究科名を明記する。官公庁や民間団体の場合は部課名まで記入する。

3枚目：英文要約(タイプ用紙ダブルスペース250字以内)。この要約には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡明に記述する。

4枚目：和文要約(編集用；英文要約と同一内容)。

5枚目以降本文、注記、参考文献、図・表の順に書く。

- (2) 外国人名・地名等の固有名詞には、原則として原語を用いること。固有名詞以外はなるべく訳語を用い、必要な場合は初出のさいだけ原語を付すること。
- (3) 数字は算用数字を用いること。
- (4) 参考文献の引用は執筆要項補足による。
- (5) 図・表は1枚の用紙に刷り上りと同様のサイズになるように1つだけ書く。また図と表のそれぞれに一連番号をつけ、図1、表3のようにする。(上記要項補足参照)
- (6) 図や写真の原稿は明瞭に作成し、Wordファイルに貼り付ける。受理後印刷の段階で明瞭なJPGまたはPDFファイル等の提出を求めることがある。なお、刷り上りは白黒になるので明度を考慮すること。
- (7) 図や表は本文に比べ大きな紙面を要する。(本誌1ページ大のものは1800文字の本文に当たる)から、その割合で本文に換算し全ページ数の中に算入すること。
- (8) 参考文献の書き方は以下の原則による。

文献記述の形式は雑誌の場合には、著者名(発表年)、題目、雑誌名、巻号、論文所在頁；単行本の場合には、著者名(発表年)、書名、版数、発行所、発行地、参考箇所の順とする。また記載は原則としてファースト・オーサーの姓(family name)のABC順とする。なお、上記要項補足参照。

- (9) 本文が欧文の場合には上記要項に準じ、著者名と所属名は和文でも記入し、和文要約は掲載用となる。

京都滋賀体育学研究における研究者の倫理について

近年、体育・スポーツに対する社会的、教育的関心が急速に高まるとともに、その科学研究に対する期待がますます増大している。他方、国内的にも国際的にも、生命の尊厳や人格の尊重、あるいは動物愛護の観点から、研究者の研究上の倫理にかかわる勧告や規定などが出されている。こうしたとき、人間を対象とすることの多いわれわれ体育学の研究者は、研究の遂行に当たって、目的の設定、計画の立案、方法の選択、被験者の選定、実験・調査の実施、結果の分析・処理、経過の公表などのすべての過程にわたって、人権の尊重と安全の確保を最優先し、かつ法に基づいて研究が行われることに充分の配慮を払うべきことを改めて確認しなければならない。また動物を対象とする研究においても、動物愛護の精神に基づいて、同様の倫理的配慮がなされなければならない。社会的、教育的要請に応えて、体育学を一層発展させるために、われわれ京都体育学会会員は、このことを個人として正しく認識し、会員相互に徹底を図るとともに、所属する機関や組織などにおいて、研究上の倫理的指針の作成や審査機関の設置など、この問題に対する具体的対応をそれぞれの状況に応じて進めることが緊急の課題であるとする。なお、研究の成果が応用される場である体育・スポーツの実践に対しても、研究者、あるいは指導者として、同様の倫理的配慮が十分になされていることを再認識する必要がある。

昭和63年2月1日提示
平成22年3月1日改訂
編集委員会

「京都滋賀体育学研究」投稿論文受領より、採否までの過程について

投稿論文は「京都滋賀体育学研究」編集委員会に関する申し合せ及び論文審査申し合せ（本誌第26巻に記載）に基づいて査読されます。

次に、論文の投稿を受けてから採否決定に至るまでの編集委員会が行なう手順について記しておきます。

1. 論文の投稿を受けた場合、編集委員会は受領書を投稿者宛にお送りします。
2. 編集委員会は各論文に対する審査員を決め、論文査読の依頼をします。
3. 審査の評定に従って編集委員会は投稿者に通知を行ないます。
4. 要訂正の通知をした場合も、60日以内に再度投稿されることを願っております。

概略、上記の通りです。編集委員会は鋭意、迅速な発刊に向けて努力しておりますが、通常年1回の発刊予定ですから、論文受理時期によっては次巻に回る場合もございますのでご了承下さい。

会員諸兄弟におかれましては、どうぞ研究の成果をおまとめ頂き、早目に御準備御投稿下さいますようお願いいたします。

編 集 後 記

第33巻をお届けいたします。本号で掲載されております資料1編の「ACL 再建術後および半月板部分切除術後の心理・栄養学的変化について」は、本学会の研究基金学術研究助成を受けた研究をまとめたものです。本研究は、ACL 再建術後および半月板部分切除後、3ヶ月以上の通院リハビリテーションを必要とした6名を対象とし、心理・栄養学的変化について検討しています。その結果、当初のリハビリテーションプロトコル通りに治療が進行した軽快例では、心理指標である POMS 得点が手術前と比較して緊張-不安、抑うつ-落込み、怒り-敵意、活力、疲労で減少が見られたが、難渋例では増加が見られたと報告しています。また、栄養面では軽快例は摂取エネルギー量が術後増加したのに対し、難渋例では摂取エネルギー量が術後の時間経過とともに減少したと報告しています。この結果は、ACL 再建術後患者における心理・栄養学的アプローチにおいて有用な知見であるといえます。

本学会では総説、原著論文、資料、実践研究の投稿を募集しています。多くの学会会員の方々に投稿いただき、学会としてのアクティビティを今後とも高めていきたいと考えています。大学関係者はもとより、中学校や高等学校、スポーツ関連施設等での運動指導現場の方々におかれましても、是非多くの皆様の論文投稿をお待ち申し上げます。

(編集担当 真田 樹義)

編 集 委 員

真田 樹義(委員長) 野村 照夫 竹田 正樹 佃 文子 岡本 直輝

Editor-in-Chief

Kiyoshi SANADA, Ritsumeikan University

Editorial Board

Teruo NOMURA, Kyoto Institute of Technology

Masaki TAKEDA, Doshisha University

Fumiko TSUKUDA, Biwako Seikei Sport College

Naoki OKAMOTO, Ritsumeikan University

京都滋賀体育学研究 第33巻

平成29年 7 月30日印刷

平成29年 7 月31日発行

編集発行者 岡本 直輝

印 刷 者 サンライズ出版株式会社

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

発 行 所 京都滋賀体育学会

〒525-8577 草津市野路東1-1-1

立命館大学スポーツ健康科学部 岡本直輝

広告掲載企業

(五十音順)

有限会社 アルコシステム

セノー株式会社

特定非営利活動法人 日本トレーニング指導者協会

富士医科産業株式会社

協賛企業

(五十音順)

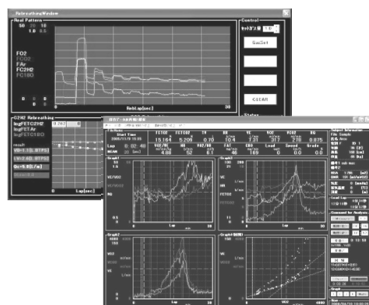
株式会社 す屋吉

生体ガス分析システム

Respiratory Analysis System

Breath by Breath モニターシステム [ARCO2000-METシリーズ]

～安静時代謝からVO₂max, AT 計測まで多岐にわたる応用測定に対応～



本邦初!

ミキシングチャンバー方式
マルチモニターシステム(2～5連)

質量分析計ならではの高速応答性能と最大8種類のガスの同時連続分析機能を生かした、高精度で多機能なシステム構築が可能です。同時に5人を計測することが可能なマルチモニターシステムを開発致しました。

ポータブルガスモニター [AR-10 O2郎]



[Portable Gas Monitor AR-10]

Portable Gas Analyzer for Measurement of Metabolism
基礎代謝・エネルギー代謝・O₂, CO₂濃度分析
用途に応じて3モード計測



フェイスマスク



ダグラスバッグ



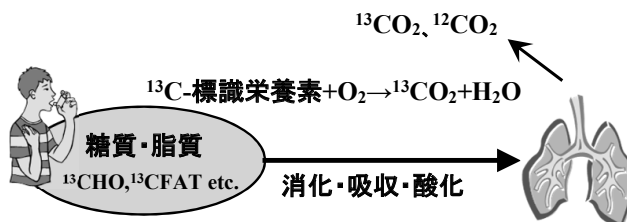
基礎代謝フード

¹³CO₂/¹²CO₂安定同位体比測定

Measurement of ¹³CO₂ / ¹²CO₂ Stable Isotope

弊社の生体ガス分析用質量分析システムでは、各種 ¹³C標識化合物の投与により、その燃焼物である¹³CO₂を計測することができます。

糖質や脂質などの投与栄養素の燃焼動態を把握することができる¹³CO₂/¹²CO₂分析と同時にVO₂, VCO₂, RQ等のエネルギー代謝因子と同時連続分析が可能です。



生体ガス分析のコーディネーター
有限会社アルコシステム

TEL: 04-7169-7050 FAX: 04-7169-1470
千葉県柏市柏 4-11-17 イワダビル

 **ARCO SYSTEM**

E-mail: mail@arcosystem.co.jp <http://www.arcosystem.co.jp>

Japan Society of Scientific Coaching for Training 日本トレーニング指導学会のご案内

日本トレーニング指導学会は、日本トレーニング指導者協会（JATI®）の理念及び目的の達成のために設立されました。研究や実践結果の発表を通じて研究者と実践者の相互理解を深め、より現場的な研究を促進して行くことで、トレーニング指導の発展に寄与してまいります。

第6回日本トレーニング指導学会大会のお知らせ

日程 2017年**12月16日**（土）

※翌17日は同会場にてJATI研修・交流会を開催

会場 東京都内近郊を予定

参加募集 2017年10月頃受付開始予定

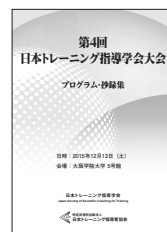
※発表しない方も参加いただけます。

発表締切 2017年**10月31日**（火）**必着**

発表種別 科学研究・実践報告・国際情報

※指導現場での事例報告（失敗事例も含む）も大歓迎！

発表方法 「口頭発表」・「ポスター発表」



第4回大会の抄録集



過去の発表の様子

学会誌「トレーニング指導 (Journal of Scientific Coaching for Training)」投稿募集

本学会誌は子どもから高齢者、一般人からアスリートまでの幅広い層を対象とした、競技力向上、フィットネス増進、さらには介護予防などを目的としたトレーニング指導についての理論、方法の発展および実践論の普及のために、トレーニング指導者の独創的な研究および実践の成果発表、およびトレーニング指導者の意見発表、討論、情報交換の場を提供することを目的として刊行します。

◆原稿の種類

1) 原著研究論文 2) 原著実践論文 3) 研究ノート 4) 実践ノート

詳しくは、ホームページ (<http://www.jati.jp/instit/posting.html>) をご覧ください。

※次号の学会誌は、2017年中に発行予定です。



お問い合わせ



特定非営利活動法人

日本トレーニング指導者協会

〒106-0041 東京都港区麻布台3-5-5-907
TEL:03-6277-7712 FAX:03-6277-7713
<http://www.jati.jp> E-mail:info@jati.jp

Gymnastics

選手の力を最大限に引き出せる
製品を送り出す。
セノーの体操器具は
そんな思いで創られています。



VolleyBall

器具だけでは終わらない
セノーのサポート力。
ニーズに応えた
製品をお届けします。



BasketBall

様々な設置条件に
合わせた安全な製品。
セノーだからできる
オンリーワンを提供します。



Health & Fitness

未来を見据えた健康事業。
製品だけでは終わらない
サポートを目指します。



Gymnasium

総合スポーツメーカーとしての
より良い環境提供。
小学校から総合体育館まで
最適な環境を提案します。



Education

体育で苦手意識を作らせない
「できない」を「やった!」に変えて
運動を楽しむ
サポート器具を開発します。



思いきりスポーツを楽しむために、自分の限界に挑戦するために、
セノーはスポーツ器具の製造からメンテナンスまでを一貫して行います。



セノー製品の
最新情報をチェック!



FUJI 人工環境制御室

低酸素
仕様

新開発マルチ式空気調和システムによる
高精度の温度・湿度制御



仕様・性能

O ₂ 濃度	低酸素 制御範囲 20.9%～11.0% 常用15%
N ₂ 流量	93.0% 300L/min (操作温度25℃)
温度	5～45℃ ±0.5℃ (20℃以下は換気制御無し)
湿度	30～80% ±3% 常温制御

人工環境制御室は特注品となっております。
詳細資料等は下記までお問い合わせください。

Renewal

FUJI ポータブル型小型低酸素システム



スポーツ医科学に特化した高性能低酸素
トレーニングシステム

小型・移動式新製品を新開発

場所を選ばずに酸素濃度15%環境を再現可能

- ・ 業界初のポータブル型
- ・ 高地トレーニング環境を創出します。
- ・ 場所を選ばず合宿先等にも持ち出しが可能。
(ダグラスバッグや組立式ブースの併用等)
- ・ 故障選手のトレーニングにも最適です。

スポーツ医科学機器メーカー / Thermo Fisher 質量分析計輸入代理店

富士医科産業株式会社

<http://www.fujiika.com> info@fujiika.com

技術開発センター

〒277-0026 千葉県柏市大塚町4-14

Tel : 04-7160-2641 Fax : 04-7160-2644